

## パーソナリティはどこに存在するのか——状況論・特性論の新たな架け橋を求めて

William Fleeson (2004) "Moving Personality beyond the Person-Situation Debate: The Challenge and the Opportunity of Within-Person Variability" *Current Directions in Psychological Science*, Vol. 13, No. 2, pp.83-87.

労働政策研究・研修機構研究員 深町 珠由

職場でも日常生活においても、「Aさんは外向的だ」のように、他者の性格（パーソナリティ）特徴をとらえてラベルづけることがある。あるいは自分自身の性格を「外向的」というラベルで自覚することで、自己理解を深める行動をとることがある。このようなふるまいを人間は意識的にも無意識的にも行っている。

このように、「外向的」「協調的」などといったラベル付け（パーソナリティ特性: personality traits）によってパーソナリティを理解することを、特性論とよぶ。特性論によるパーソナリティ表現は一般に理解しやすく、パーソナリティ研究分野においても特性論をベースとした研究が非常に多彩で大多数を占めることからもうなずける（余談だが、各種心理検査やパーソナリティテストの作成には、各特性間の独立を仮定して因子分析を行い、尺度構成を行うのが定石となっている）。

一方、「外向的」な特性を持つAさんは、どのような状況においても常に外向的にふるまうとは限らない。例えば、パーティー会場では外向的で活発な行動を見せてはいるものの、大学のゼミでは外向的なふるまいを見せず、挙手による質問もせず、むしろ内向的に行動する可能性もある。では、場面レベルでの行動が異なるにもかかわらず、Aさんが「外向的だ」と周囲から判断される根拠は何であろうか。状況に応じていつも行動が変化するのであれば、「外向的」という特性は果たして信頼に足る指標となりうるのだろうか。○○的あるいは××型という特性論のラベルづけそのものに根拠がないだけでなく、特性論自体も不要なのではないか。このような極端とも言える主張で心理学界を揺るがしたのが、1968年にWalter Mischelが提唱した状況主義的アプローチ、または状況論(Situationalism)と呼ばれる立場である。この状況主義は心理学の諸分野に影響を与えたが、とりわけパー

ソナリティ研究では、個々の人間という枠組みの中で閉じたモデルに固執してきた従来の立場に一石を投じ、「人間-状況論争(Person-Situation Debate)」の発端となった。論争は30年もの長きにわたり、生産的でない議論も生まれるなどの弊害もあったが、本論文著者William Fleesonによると、具体的な年月は示されていないものの、昨今では論争が終息したとの共通認識を研究者間で持つに至ったと述べている。

本稿では、この「人間-状況論争」における二つの立場と論争終息に至った経緯、さらに今後のパーソナリティ研究の方向性と問題点について、Fleesonの論文に沿って概観したい。

パーソナリティを状況と切り離れた人間側のみでとらえる立場（従来の特性論）では、人間の行動の大部分はその人の特性によって規定されると考えた。つまり、人間は（場面の違いによって多少誤差が生じるにせよ）大部分の時間は類似した行動を一貫してとるのであり、このような行動の安定性があるからこそ「外向的」といった一般的な特性で人間を表現することには意味があるとされた。一方、状況論では、ある時には外向的だが、ある時には内向的というような、同一人物がとる一連の行動で分散が大きい場合には、「外向的」というラベルを付与することには意味がないと考えた。むしろ、その人が目の前に置かれた状況をどう認知し、それにどう対処しようとしたかというプロセスに着目すべきだという考えである。

ここでFleesonは、両者の立場を次のように統合して考えた。すなわち、状況論の立場は人間の個々の具体的に瞬間的な行動においては正しく、一方の特性論も、その人に典型的に現れる行動の表出パターンこそ特性の現れであるとする仮説を立てた。それを次に示す実験で検証している(Fleeson, 2001)。

実験は、日中の決まった時刻に被験者自身が直前に  
行っていた行動や感情を記録し、これを一日数回、数  
日間にわたって続けるという内容であった。記録され  
た行動データは、次に示す五つの諸特性をどの程度示  
すかという観点で、実験者が7段階で評定した。ここ  
で使用された特性とは、ビッグ・ファイブと呼ばれる  
世界的に広く安定して存在が確認されている特性群  
(外向性、協調性、誠実性、情緒安定性、知性、の5  
特性)である。この方法により、各個人の一連の行動  
が各特性をどの程度反映しているかのデータが得られ、  
それによって一個人内だけでなく個人間(他の被験者  
同士)の比較が可能となる。

分析では最初に、特性ごとに、行動に対する個人内  
の評定値の変動の大きさと被験者間の評定値の変動と  
を比較した。その結果、個人がとる一つひとつの行動  
がどの特性を示しているかのバラツキ具合は非常に大  
きく、他人のデータからみたバラツキと同程度かそれ  
以上であることが確認され、状況論を支持する結果と  
なった。具体例で考えると、一見「外向的」にみえる  
Aさんの行動を個々に分析すると、外向的な行動と  
全く外向的でない行動がある上に、その分散も大きく、  
それは一見「外向的でない」Bさんの行動の分散と同  
程度かそれ以上に大きかったことを意味する。

では、特性を測定することは無意味だったのであ  
ろうか。「外向的」に見えるAさんのパーソナリティは  
幻だったのか。次に示す結果はそれを打ち砕いてくれ  
る。この実験では数週間に渡って同一人物の測定を行  
っていた。そこで、ある別々の期間において各特性の平  
均値をとり、それがどの程度変動したかを散布図にプ  
ロットして比較した。すると、一連の行動から測定さ  
れた各特性の平均値は時間が経過しても安定して一定  
の位置にとどまるだけでなく、各個人が持つ特性の平  
均値の高低(外向性の傾向が強いかわいという、個  
人間のバラツキ)という相対的位置関係もほぼ保持さ  
れることが明らかになった。つまり、Aさんの個々の  
行動が示す特性は必ずしも外向的でないものも含ま  
れ、ばらついているが、それらが一連の行動としてま  
とまって観察された場合に、平均値としてはAさん  
の特性(「外向的」)を示しており、それは時間が経過  
しても安定的に確認されたこと、さらにBさんより

も外向的なAさんは時間が経過してもやはりBさん  
よりも外向的であることが確認されたことになり、特  
性の存在を支持する結果であった。すなわち、この実  
験によって、特性論・状況論両者の立場を融合する結  
果が導かれ、論争の決着を示す一根拠が示されたので  
ある。

最後に、両者を統合した新たなパーソナリティ研究  
について概観したい。特性論・状況論両者の立場を併  
せ持つ相互作用論(interactionism; Endler &  
Magnusson, 1976)には、今後の展開を期待したいと  
筆者は考えている。相互作用論は、人間による状況の  
認知やその対処へと至るプロセスを重要視する点では  
状況論と相違ないが、一方で状況への対処の仕方その  
ものにその人らしさを示す特性があるとし、特性の存  
在も認める立場である。一方、その枠組みが提示され  
て30年近く経過したにもかかわらず、実験的知見の  
積み重ねが十分と言えず停滞している感も否めない。

近年、両者を統合するコネクショニストモデル(人  
間の神経回路網を模したモデリング手法で、工学系分  
野のニューラルネットワークモデルと同義)で実装さ  
れた、認知感情パーソナリティシステムの試みが注目  
されている(Shoda, LeeTiernan, & Mischel, 2002)。  
しかしこのモデルでは、例えば敵対する人間関係が時  
を経て次第に友好関係に転じる過程など、我々が現実  
場面で体感するようなパーソナリティの動態的側面を  
捉えてはいない。今後の展開に期待したい。

#### 参考文献

- Fleeson, W. (2001) Toward a structure-and process-  
integrated view of personality: Traits as density distribu-  
tions of states. *Journal of Personality and Social  
Psychology*, 80(6), 1011-1027.
- Shoda, Y., LeeTiernan, S., & Mischel, W. (2002) Personality  
as a dynamical system: emergence of stability and dis-  
tinctiveness from intra and interpersonal interactions.  
*Personality and Social Psychology Review*, 6(4), 316-325.

ふかまち・たまゆ 労働政策研究・研修機構研究員。主な  
論文として「意思決定と個人要因の関係に関する認知科学的  
研究」(東京工業大学大学院社会理工学研究科博士論文)。認  
知心理学・社会心理学専攻。